様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５１０３４７

研究課題名（和文）ポスト公民権時代の米国の北・中西部都市における人種関係の変容に関する地域研究

研究課題名（英文）Transformation of Race Relation in U.S. Midwest and North during the Post Civil Rights Era

研究代表者
藤永　康政（Fujinaga, Yasumasa）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：２０３１４７８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1960年代の米国の北・中西部における黒人の政治社会運動の拠点であったシカゴとデトロイトの文書文献調査を通じ、黒人の運動が、黒人のアメリカ社会認識と自らのアイデンティティを具体的にどのように変化させ、その一方で黒人の動きがいかなる白人市民の行動を導き出し、新たな政治連合が構築されるに至ったのかを解明したものである。最終的に本研究は、1983年ハロルド・ワシントンの市長キャンペーン（シカゴ）に最終的に焦点を合わせ、この選挙運動が、1960年代後半の公民権運動と密接な関係があり、そのような関係性があるからこそ、白人有権者の離反と同市における激しい人種対立を導き出したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project, mainly through archival documents investigation at Chicago and Detroit as well as oral history hearings, illuminates the historical process of new urban ethno-racial political coalition during the post civil rights era, which is closely related to the transformation of African Americans' perception of American society and their post civil rights identity as well as the reaction of "white" citizens and voters to the rise of the new coalition. Focusing on Harold Washington's mayoral campaign of 1983 in Chicago, this project found very close relationship between Washington campaigners and civil rights activist of the late 1960s, the relationship that average white voters of the era revolted against.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：人種　黒人　ブラック・パワー　労働運動　公民権運動　アメリカ　都市　６０年代

１．研究開始当初の背景

(1)本研究は、わが国におけるアメリカ公民権運動に関する研究動向の批判的検討に始まり、近年、アメリカ合衆国での公民権運動研究の主流的な見解となっている「長い公民権運動論」を大々的に援用する形で、1970 年代以後のアメリカ北部・中西部都市の人種関係の変容とアフリカ系アメリカ人を中心とする公民権運動の関係を明らかにすることを目的に実施された。

(2)これまでの公民権運動研究は、極めて硬直的な二元論によって特徴づけされる。たとえば、〈非暴力運動の南部〉対〈暴動の北部〉、〈人種統合を求めた 60 年代前半の公民権運動〉対〈アメリカ社会からの分離を求めた同年代後半のブラック・パワー〉といったものがその代表例としてあげられよう。わが国における研究のなかから比較的広く読まれているもののなかから例をあげれば、本田量久『「アメリカ民主主義」を問う』（唯学書房、2005 年）などはまさにこのような二元論によって特徴づけられるものであるし、影響力の大きな一般書のなかでは、荒このみ『マルコムＸ』（岩波新書、2009 年）の議論もまたそうである。さらにまた、上杉忍『アメリカ黒人の歴史（中公新書、2013 年）も、ブラック・パワーを白人のバックラッシュを誘発したものとして、否定的に捉えている点では、上の二つと同じ枠組みのなかで公民権／ブラック・パワー運動を論じていると言えよう。

(3)一方、ここ数年、公民権運動を分析するにあたっては、マーティン・ルーサー・キングが活躍した時代（1955 年～1968 年）のみを考察することでは不十分であり、その前後の諸運動を検討対象としなくてはならないとする「長い公民権運動論」が提唱されている。この「長い公民権運動論」は、旧来の「短い公民権運動研究」を批判し、それがキングの運動に代表される 60 年代前半の南部公民権運動の理想化と、非暴力の運動に収斂されえない北部都市の運動の周縁化を招いてしまい、上述の二元論的枠組みをさらに固めてしまったと主張している。その最も重要な提言は、時代考察の枠組みの拡大だけにあるのではなく、二元論のなかに容易に回収されえない運動の実証的考察を通じ、硬直した二項対立を乗り越えることを呼びかけているところにある。

(4)そこで、本研究が目指したのが、「短い公民権運動」が終わり、人種対立が激しくなったと一般的に理解されている 70 年代以後の北・中西部の都市、具体的にはデトロイトとシカゴの都市政治の変貌を、公民権運動との関連の上で、いまいちど詳しく検討するということである。

２．研究の目的

(1)本研究は、文献資料や聞き取り調査などの実証的な水準を高め、60 年代後半から 80 年代初頭までの米国の人種関係／人種秩序の変容の具体的過程を明らかにし、未だ一般に「黒人の急進化が白人のバックラッシュを誘発した」と二元論を脱せずにいる公民権運動末期のアメリカ社会理解の脱構築を目的とした。その考察の対象は、マーティン・ルーサー・キングが北部で本格的運動を展開した唯一の都市であったシカゴ、戦後のリベラル勢力の中心を一貫して担っていた全米自動車労組の本拠地であり、1967 年には大規模な人種暴動の現場ともなったデトロイトである。

(2)リベラルな労働組合が強く、且つバックラッシュも激しかったという共通点を持つ両都市は、本研究にとって、以下の点において格好のケーススタディの対象となる。60 年代後半の労働組合の動向を探ることは、リベラル・コンセンサスの変容と「バックラッシュ」興隆の具体的過程を検討するうえで重要であり、両都市は、米国産業の脱工業化など、社会経済的激変の中心地でもある。

(3)研究の最終的目的は、「ポスト公民権時代」における人種関係とアメリカ・リベラリズムの変容過程を実証的に明らかにすることにあった。

３．研究の方法

(1)本研究は、ワシントンの連邦議会図書館、デトロイトとその近辺のアナーバーの文書館、シカゴ市立図書館の文書史料と、運動関係者への聞き取り調査を中心に進めた。研究期間の前半は、議論の大枠を整理しながらリサーチを遂行し、その後半は、1970 年代シカゴに焦点を合わせ、ひとまずの成果を発表するとともに、まとまった成果の公刊に向けての準備を行った。各年の研究の内容は以下の通りである。

(2)初年度に当たる平成 24 年度は、マイクロ・フィルム・コレクション(Student Nonviolent Coordinating Committee Papers, Congress of Racial Equality Papers)の調査に年度を通じて従事し、8 月 5 日から 21 日まで、米国ワシントン D.C.連邦議会図書館、ミシガン州アナーバーのベントレー歴史図書館、同州デトロイトのウェイン・ステイト大学ウォルター・リューサー図書館所蔵の文書文献のリサーチに従事した。またアナーバーでは、1960 年代に運動の周辺で活動していた白人牧師と面談し、聞き取り調査を行った。

(3)平成 25 年度は、前年度に引き続きマイクロフィルム史料のリサーチに年度を通じて従事しながら、8 月 26 日から 9 月 6 日まで、ワシントン D.C.ならびにシカゴで調査に従事した。このうちワシントン D.C.では、ワシントン大行進 50 周年記念に関連したイベントに参加し、①市民主催のシンポジウム Conference on Civil Rights: Marching Forward By Looking Back(8 月 27 日)に参加して公民権運動の経験した市民の声を聴取

し、②わが国でも広く報道された公式のワシントン大行進 50 周年記念行事(8 月 28 日)に参加して公民権運動が今日どのように語り継がれているのかに関する調査を行った。またシカゴでは、シカゴ市立図書館所蔵の新聞資料、ハロルド・ワシントン文書コレクションの調査に従事した。

(4)最終年度に当たる平成 26 年度は、前の２カ年で不十分であったアメリカでのリサーチを行い、研究成果の単著書籍としての刊行を目指した準備に入った。このうちアメリカでのリサーチは、9 月 7 日から 9 月 18 日まで、前年に引き続いてシカゴ市立図書館所蔵のハロルド・ワシントン文書コレクションおよび新聞文献、これに加えて、初年度で不十分に終わったデトロイトのウェイン・ステイト大学ウォルター・リューサー図書館所蔵の全米自動車労働組合文書、コールマン・ヤング文書、ミシガン大学ラ・バディー図書館所蔵の新聞雑誌文献ならびにベントレー歴史図書館所蔵のアルバート・クラーグ文書、ロバート・F・ウィリアムス文書を中心にリサーチを行い、デトロイトにおいては公民権運動に実際に従事した人びとへの聞き取りインタビューを試みた（本格的な聞き取りはできなかったが、この事情については後述する）

４．研究成果

(1)初年度においては、研究目的をより明確にするために、諸議論を整理するための論文を公刊し、ならびに夏のワシントンでのリサーチについては、その結果の一部を早速同年 9 月のアメリカ史学会で発表した。この過程で判明したことは、1950 年代半ばに興隆する公民権運動は、それまでの運動に対する異議申し立ての要素が強いということであった。1940 年代半ばからのアメリカ黒人の運動では、「体制批判」を回避しつつアメリカン・リベラリズムに寄り添う形での黒人の地位向上を目指す傾向が強まるのを確認することができる。そこで本研究では次のような仮説を立てた。1960 年代以後の黒人の急進化の開始は、リベラリズムに吸引された形での「運動の狭隘化」に抗うという性格を強く有するものであり、この特質こそ、その後のブラック・パワー運動のなかで強く打ち出されていくものである。ブラック・パワー運動とは、1930 年代のラディカリズムが、若干の質的変容を伴いながら、いわば「隔世遺伝的」に継承されたものと考えることができる。

(2)これら初年度の研究の成果は、論文「ブラック・パワーの挑戦とアメリカン・リベラリズムの危機―ニュー・デトロイト委員会の活動を中心に」『アメリカ研究』第 35 号、ならびにアメリカ史学会第 9 回年次大会シンポジウム報告「公民権運動とブラック・インターナショナリズム」という形で発表した。

(3)本研究の２年度目にあたる平成 25 年度には、本研究の主題である「ポスト公民権時代」へと焦点を本格的に移動し、1983 年、シカゴ市の歴史上初めて黒人が市長に当選することになった 1983 年の市長選挙を中心に英語論文を執筆した。この選挙は激しい人種対立のなかで繰り広げられたことで有名である。黒人で現職の連邦下院議員であるハロルド・ワシントンを擁立するにあたって大きな役割を果たしたのは、1966 年、同市の公民権運動の中核を担った人びとであり、彼らが喚起した「公民権運動のイメージ」こそ、その非暴力的な実態に関わらず、人種対立が浮上する大きな誘因となっていた。これは「黒人の進歩」が、実のところは、人種対立と併存していたことを示す実例のひとつであると思われる。

(4)上の研究の成果は、英語論文にまとめあげ、"Black Power at the Polls: Harold Washington Campaign of 1983 and the Demise of the Democratic Machine in Chicago,"と題し、*Japanese Journal of American Studies* に、本年度に原稿を書き上げ、翌平成 26 年に公刊している。

(5)なお、ハロルド・ワシントンは、若きバラク・オバマが自らの「ロール・モデル」としていたことで知られている。このことに関連した諸問題を小論にまとめ、「黒人政治の黄昏―バラク・オバマの時代と公民権運動の選択的記憶」と題して、『歴史学研究』第 907 号に公刊した。

(6)また平成 25 年 2 月 28 日に立教大学アメリカ研究所主催の公開シンポジウム「20 世紀の黒人世界―国家・抵抗・ディアスポラ」で、1970 年代の黒人の運動と現在の諸問題との関連を「公民権運動の記憶」という観点から考察し、「What's Love Got to Do with It?―公民権運動の記憶とブラック・パワー」と題した報告を行った。この報告原稿は、シンポジウムでの質疑応答や意見交換の内容を踏まえて上で論文として改稿し、同年 3 月に、同じタイトルで『立教アメリカン・スタディーズ』第 36 号に公刊している。

(7)本研究最終年度には、主には前述の英語論文の仕上げと、本研究を単著としてまとめあげる本格的な準備と作業に取り組んだ。研究成果をまとめあげるに際して改めて直面した問題は、わが国においては「長い公民権運動論」を本格的に紹介した研究業績が極めて少なく、これを本格的に論じるには、「短い公民権運動」の後の時代を中心にした本研究のみでは、アフリカ系アメリカ人の研究に従事しているごく少数の歴史研究者しか理解できないものになるということであった。そこで、本研究の一部は、所記の計画通りに、近年中の単著公刊を目指して、現在、『公民権運動とブラック・パワー』という課題で論考をまとめ上げることを目指すこととし、また別の一部は平成 27 年度から３カ年間の科学研究費基盤研究(C)「米国のブラック・ナショナリズムに関する実証的研究―シビック・ナショナリズムと人種」に発展的に継承

させている。
(8)なお、本研究のひとつの目的であった聞き取り調査であるが、いくつかのケースにおいては、上に記した通り大きな進展があったものの、デトロイトにおいては、その運動の中心となった人物との面談は、不本意ながらも、不十分な形に終わらざるを得なかった。1960 年代に運動家たちだった人びとの高齢化が進み、何度も面談を繰り返しつつ聞き取り内容を深化させていくということが現実的に不可能となったためである。この点は、1960 年代研究が直面している大きな問題のひとつであり、同じく面談や聞き取りを計画に組み込んでいる現在従事中の研究においても、この問題点はしっかりと意識した上で今後の研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①Yasumasa Fujinaga, "Black Power at the Polls: The Harold Washington Campaign and the Demise of the Democratic Machine in Chicago," *Japanese Journal of American Studies* 査読有, Vol. 25, June, 2014, pp.89-109
http://www.jaas.gr.jp/jjas/PDF/2014/05_Fujinaga.pdf
②藤永康政「What's Love Got to Do with It? —— 公民権運動の記憶とブラック・パワー」『立教アメリカン・スタディーズ』、査読無、第 36 号、2014 年 3 月、pp. 7-38
http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IAS/ras/36/fujinaga.pdf
③藤永康政「ブラック・パワーの挑戦とアメリカン・リベラリズムの危機 —— ニュー・デトロイト委員会の活動を中心に」『アメリカ史研究』、査読有、第 35 号、2012 年 8 月、pp.40-58
④藤永康政「黒人政治の黄昏 —— バラク・オバマの時代と公民権運動の選択的記憶」『歴史学研究』、査読有、No.907、2012 年 7 月、pp.26-32

〔学会発表〕（計２件）
①藤永康政「What's Love Got to Do with It? —— 公民権運動の記憶とブラック・パワー」立教大学アメリカ研究所公開シンポジウム「20 世紀の黒人世界 —— 国家・抵抗・ディアスポラ」、2014 年 2 月 28 日、立教大学（東京都豊島区）
②藤永康政「公民権運動とブラック・インターナショナリズム」日本アメリカ史学会第 9 回（通算 37 回）年次大会シンポジウム、2012 年 9 月 22 日、一橋大学（東京都国立市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
藤永　康政（FUJINAGA, Yasumasa）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：20314784

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：